

外来水生植物キショウブの生態と適切な管理法

岡山大学 大学院
環境生命科学研究所

中嶋 佳貴

はじめに

植生護岸を始めとした水辺緑化において、景観形成を特に期待する場合、花の美しさが重要視され、抽水植物のキショウブ (*Iris pseudacorus* L.) が重要な構成種となってきた (桜井 1989)。

キショウブはアヤメ科アヤメ属の多年生抽水植物で、自然高は0.4～1.5 mに達する。図-1及び図-2に示す通り、4～6月には鮮黄色の美しい花を咲かせて湖沼や河川の沿岸帯に美観を創出する。蒴果は断面がほぼ三角形をした4.0～7.5 cm程度の長楕円形をしており、9～11月に成熟して裂開し、種子を散布する (角野 1996; 大滝・石戸 1980)。秋季には新しい分けつが出現し、越冬後、春季には一部の分けつから花茎が伸長し始める。繁殖力は旺盛で、高い窒素要求性を有するため (Sutherland 1990)、富栄養化の進んだ水域環境下でも多く見出される。ダム貯水池のように貯水量の増減に伴って大きく水位変動が生じ、冠水条件や乾燥条件が繰り返される水辺環境でも生育することが可能である (百瀬 2001)。耐乾性や、水中の窒素・リン除去 (遠田 1998) 及び重金属除去 (浅井ら 2006) などの水質浄化能にも優れた特性を有している。地下部は直径1～4 cmの根茎を有し、不定根を地表面付近でマット状に発達させるため護岸の土壌浸食も抑制できる。

原産はヨーロッパから中央アジアで



図-1 岡山市内を流れる西川緑道公園のキショウブ群落 (2019年5月14日撮影)

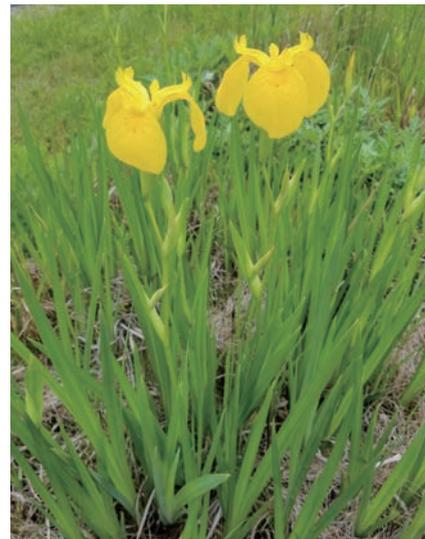


図-2 キショウブ開花個体 (2019年5月9日撮影)

あり、日本には明治時代に園芸植物として導入され、現在では全国各地の湖沼、ため池、河川、水路などに帰化している (角野 1996; 大滝・石戸 1980)。世界ではヨーロッパ全土に分布し (Sutherland 1990)、特にイギリスやアイルランドでは河川や湖沼の水辺緑化に利用されている事例が多い (高橋・近藤 2004)。また、北アメリカ全土、アジアではコーカサス地方、シリアやシベリア地方、さらに北アフリカや、南半球のニュージーランドまで分布が広がっている (Cody 1961; Preece 1964)。これらの地域の大部分が日本と同じように、当初は園芸用として導入された経緯がある。

日本では全国各地において、水辺緑化に盛んに利用されてきたが、2005年に制定された外来生物法において、キショウブは重点対策外来種 (旧要注意

外来生物リスト) にリストアップされた。総合的な対策が必要とされている現状では、繁殖特性を把握し、既存群落を適切に管理する必要がある。

1. キショウブの分布拡大に寄与する種子発芽特性

自然条件下におけるキショウブの分布拡大は種子散布及び根茎の栄養繁殖に依存する。そこで、まず種子による分布拡大を検討するために、貯蔵条件がキショウブ種子の発芽におよぼす影響について検討した。

(1) 種子の異なる貯蔵条件が発芽に及ぼす影響について

1997年に岡山大学圃場の栽培群落において、蒴果が裂開した直後の10月3日に種子を採取した。種子は10

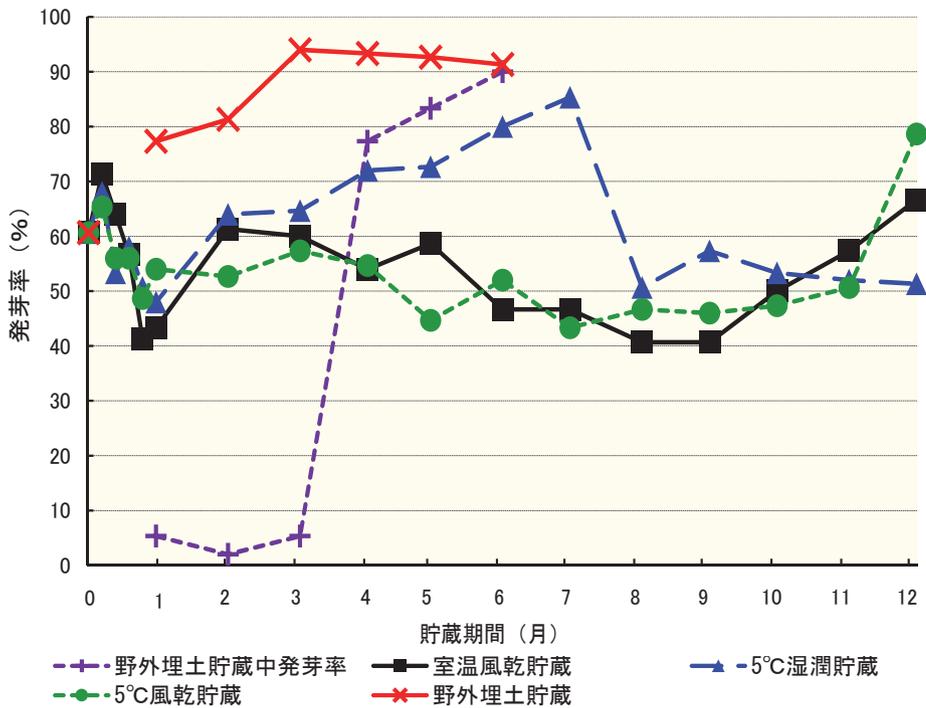


図-3 貯蔵条件が異なる種子の変温条件下における発芽率の経時変化



図-4 朔果内発芽種子



図-5 種皮に亀裂を生じた種子



図-6 種皮に亀裂を生じた発芽種子

月 23 日から室温での風乾貯蔵、5°C 条件下での湿潤及び風乾貯蔵、野外での埋土貯蔵の 4 条件で貯蔵し、野外埋土貯蔵を除く 3 条件は貯蔵開始から 1 ヶ月までは 6 日毎に、以降は 4 条件とも 1 ヶ月毎に 11 回取り出して発芽実験に供試した。発芽実験はインキュベーター内で行い、発芽床の温度条件は昼温 30°C、夜温 23°C の変温条件とし、光条件は 12 時間日長 (30,000lx) とした。

図-3 に示す通り、発芽率が最も高く推移したのは野外埋土貯蔵 (地温: -1.3°C ~ 25.5°C) の種子で、貯蔵期間が 3 ヶ月間になると 94.0% と他の処理区より有意に高く、他のどの貯蔵条件よりも休眠覚醒が進んだ。貯蔵期間中の発芽は野外埋土貯蔵についてのみ認められ、貯蔵期間 3 ヶ月間までは 2.0 ~ 5.3% であったが、4 ヶ月間になると 77.3% と急激に高まり、以降は大部分の種子が貯蔵中に発芽した。これより、野外の種子は大部分が春期に発芽するが、一部は秋期に発芽することも確認した。

(2) 秋期に出芽する種子集団について

秋期に出芽する実生は自然条件下でも見出され、年内中にある程度生長して越冬する。越冬後、翌春に速やかに生長を再開するため、春期に出芽する実生よりも早期に大型の個体に生長する。そこで、種子の朔果の裂開程度、着生位置、種子型および種皮亀裂の有無と秋期に出芽する種子との関係について調査した。

まず、秋期に出芽する割合を把握するために、1998 年 9 月 19 日に採取した種子について、水田土壌を充填した 1/10,000a ワグネルポットの地表面へ播種して野外に設置した。その結果、大半は結実後翌年の春期に出芽したが、結実後同年の秋期にも 2 ~ 16% の割合で出芽した。同時に採取した種子について、インキュベーター内で発芽実験を実施した結果、完全に裂開した朔果に残っている種子は室温風乾貯蔵で休眠性が深かったが、野外実験における出芽率と朔果の裂開程度との間に相関はなかった。その後、

2000 年から 2001 年にかけて、種子の着生位置や種子型による発芽実験を実施したが、休眠性の差は僅かで、裂開時期による違いも少なく、秋期出芽との関連性は低いと考えられた。

種々の発芽実験で秋期出芽を検証する中で、種子の採取時に種皮に亀裂を生じている種子の存在に気が付いた。そこで、2002 年の 9 月から 10 月にかけて、朔果毎に種子数と朔果内発芽種子数 (図-4) を種皮亀裂の有無により区分して計測後、採取時の未発芽種子を対象に発芽実験を実施した。その結果、種皮に亀裂 (図-5) を生じた種子は発芽 (図-6) の開始が早く、30°C 恒温条件下でも高い累積発芽率を示したため、秋期出芽に大きく寄与していると考えられた。

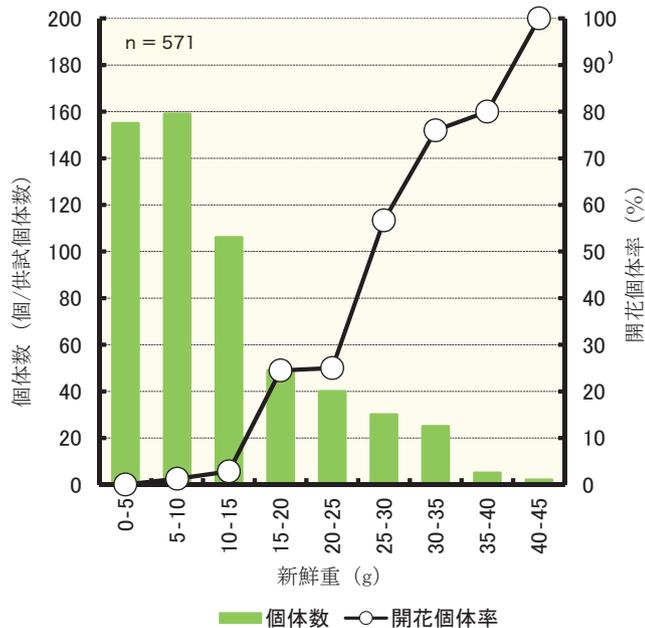


図-7 植栽個体の新鮮重別の開花個体率

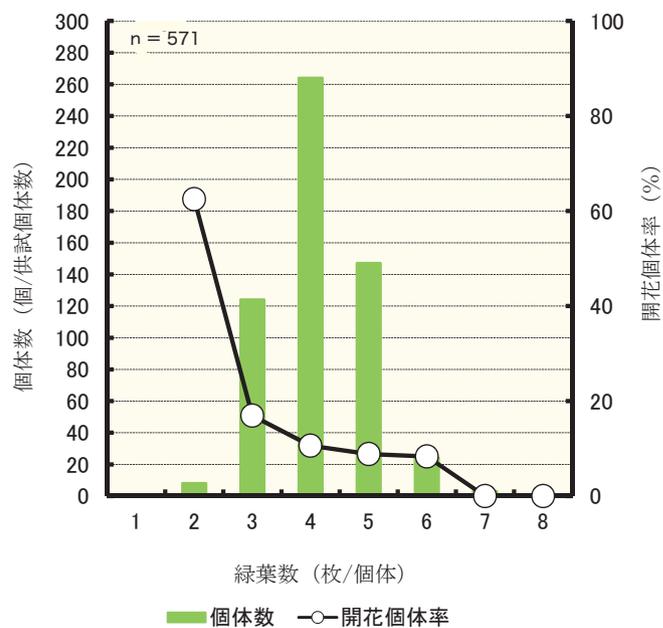


図-8 植栽個体の緑葉数別の開花個体率

2. 根茎切断片の栄養繁殖特性及び地上部刈取処理の生育抑制効果

大雨などによる自然的攪乱、刈取などの管理作業による人為的攪乱が生じると、根茎は既存群落から切断され、水流に乗って拡散後、漂着して新たに群落を形成する。水位変動等により干陸地に漂着する場合もあるが、根茎断片は大気中に根茎が露出した乾燥条件下でも3ヶ月間生存が可能とされ (Sutherland 1990)、再び水位変動や降雨等によって生育に好適な水分条件下におかれると、定着する可能性も十分にある。定着時は1個体の根茎断片であっても翌年は旺盛に抽苔して開花結実するため、開花に至る個体の外部形態を検討した。また、開花後の種子散布を抑制するために、時期の異なる花茎の切除処理ならびに地上部刈取処理後翌年の開花及び種子生産を調査した。

(1) 春季における個体の外部形態と開花との関係について

岡山大学農学部圃場において2000

年3月30日に植栽して形成した群落 (2.4 m×1.6 m) から2006年3月14日に分けつ数が1～6本、緑葉数が2～8枚からなる個体を571個体採取した。全個体について、0～45 gまでの新鮮重を5 g毎に9水準で分類し、2006年3月21日に水田土壌を充填した塩ビ製ポット (内径20 cm×深さ50 cm) に1個体ずつ植栽した。開花調査は最初に開花を確認した2006年5月14日より約1ヶ月間毎日行い、花茎毎に開花数を計測して開花日を記録した。

本実験に供試した全571個体の内、70個体が開花に至った。図-7に植栽個体の新鮮重別開花個体率を示した。開花個体率 (各水準の個体数に対する開花個体数の割合) は新鮮重が15 gより重くなるに従って徐々に高まり、植栽時に30 g以上の個体は76%以上が開花に至った。図-8に植栽個体の緑葉数別開花個体率を示した。緑葉数別の各水準の個体数の分布は4枚を中心としたほぼ正規分布に近い形を示したが、開花個体率は2枚が最も高く、緑葉数が多い個体ほど開花個体

率は低かった。

同じアヤメ属のハナショウブ (*Iris ensata* Thunb. var. *ensata*) の分けつは前年の秋季に葉身が7枚以上あれば花芽が分化し、翌春には葉芽より太く大型化する (富野 1994)。本実験の結果から、キショウブは新鮮重が25 g以上の個体であれば50%以上が開花に至ったため、ハナショウブと同様に春季に花芽を含む個体は葉芽のみを含む個体より重い可能性が高く、前年の秋季には緑葉数が多く生育の良い分けつであると推定される。また、開花に至る個体の緑葉数が少なかったのは、春季は花茎の形成にエネルギーを充実させるためと考えられる。

(2) 開花の有無が生育に及ぼす影響について

前項(1)における開花調査終了後、植栽時の新鮮重で20～35 gでは開花個体が約半数を占めたため、その内、無作為に計77個体 (開花個体:41, 未開花個体:36) を選抜して、開花した41個体は花茎を地際にて切除する花茎切除処理、未開花の36個体に

表-1 花茎切除処理および地上部刈取処理が処理後翌年の花茎数、開花数および稔実数に与える影響

処理の種類	処理年月日	反復数	花茎数 ¹⁾ (本/個体)	開花数 ¹⁾ (個/個体)	稔実朔果数 ¹⁾ (個/個体)
花茎切除処理	2006年6月30日	6	17.5 ±5.5 a	148.3 ±10.2 a	69.7 ±11.3 a
	2006年7月28日	6	16.7 ±3.6 a	141.5 ±23.4 a	73.7 ±28.2 a
	2006年8月25日	6	15.3 ±5.0 a	125.2 ±19.6 a	68.3 ±9.0 a
	2006年9月22日	6	14.5 ±1.9 a	132.2 ±27.5 a	75.8 ±15.8 a
	無処理	17	14.8 ±5.4 a	129.5 ±18.9 a	77.8 ±13.4 a
地上部刈取処理	2006年7月28日	6	15.3 ±3.9 a	83.5 ±16.5 a	42.2 ±12.8 a
	2006年8月25日	6	15.7 ±5.2 a	91.5 ±27.8 a	50.7 ±12.4 a
	2006年9月22日	6	17.0 ±4.9 a	91.5 ±9.3 a	56.3 ±8.6 a
	2006年10月31日	6	14.8 ±5.5 a	101.3 ±12.8 a	57.2 ±15.3 a
	無処理	6	12.7 ±2.7 a	135.7 ±8.9 b	82.7 ±14.7 b

1) 平均値±標準偏差で表す。続く文字は、異なる場合に5%水準で有意差があることを示す。

については刈取高を5 cmとして地上部の分けつ全体を刈取る地上部刈取処理を施した。開花個体の花茎数は全て1本であり、花茎切除処理は2006年6月30日より、地上部刈取処理は7月28日より約1ヶ月毎に、各6反復ずつ無作為に選抜して各4回実施した。翌年の2007年5月14日から6月29日にかけて花茎数及び開花数を記録し、8月8日に稔実朔果数を計測した。

表-1に花茎切除処理及び地上部刈取処理が翌年の花茎数、開花数及び稔実数に与える影響を示した。花茎切除処理は、処理の有無及び処理時期の違いにおいて、翌年の花茎数、開花数及び稔実朔果数に5%水準で有意差は認められなかった。地上部刈取処理については、刈取らない場合と比較して翌年の花茎数に有意差は認められなかったものの、開花数及び稔実朔果数が5%水準で有意に減少した。

アイルランドや北西アメリカでは、種子が運河や川の水流によって分布域が広められ (Caffrey・Monahan 1997; Raven・Thomas 1970)、アメリカモンタナ州では鳥に付着して分布域が拡大した。デンマークでは海流による種子散布が可能であることが示された (Jessen 1955)。これらの報告から、キショウブの新たな群落形成を抑制するためには、種子散布を防ぐ

ことが最優先であり、開花終了後、秋季の種子散布までの花茎切除は分布域拡大を防ぐ管理手法として有効である。ただし、花茎を異なる時期に切除しても翌年の花茎数、開花数及び稔実朔果数には影響しなかった。これに対し、地上部刈取処理は無処理と比較して、翌年の開花数や稔実朔果数を減少させた。これは、秋季における分けつの生育状況が劣り、花芽形成に影響したためと推定された。

外部形態から春季に新鮮重が重く、緑葉数の少ない分けつは花芽である割合が高く、逆に新鮮重が軽く、緑葉数が多い分けつは葉芽である確率が高いことが明らかとなった。また、開花に至らない個体は旺盛な生育を示す傾向にあったため、分けつを刈取れば翌年の生殖生長を抑制することが可能である。

3. 異なる刈取処理による耐冠水性の検討

キショウブと同じ多年生抽水植物のヒメガマ (*Typha angustifolia* L.) やヨシ (*Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud.) の防除及び管理については、刈取処理による機械的防除法が検討されており (Nelson *et al.* 1966; 桜井 1991)、キショウブにおいても機械的防除法を検討する目的で、時期

の異なる刈取処理後の耐冠水性を検討した。

2(1)と同じ既存群落から同日に126個体を採取して栽培した。2007年9月7日に生育調査を実施後 (分けつ数 4.3 ± 1.2 , 草丈 60.9 ± 11.0 cm, 花茎数 1.0 ± 0.0)、水田土壌を充填した1/5,000 aワグネルポットに1個体ずつ移植した。越冬芽の出現する時期にあたる2007年9月18日に、全ての分けつに対して、地際の0cm, 地際から1cm, 2cm, 3cm, 4cm及び5cmの刈取高で18個体ずつ刈取処理を施し、無処理の18個体を加えた7処理126個体を設定した。刈取後は同日中に、全ての刈取高について、冠水深を地際の0cm (無冠水)、地際から1cm, 2cm, 3cm, 4cm及び5cmの6水準として3個体ずつ冠水させ、計42処理3反復を設定した。その後、刈取処理から約3ヶ月後の12月11日に分けつ数を計測した。

越冬後、2008年7月28日に生育調査を実施した結果、刈取高が0cm及び1cmの刈取処理を除き、刈取高が2cm以上の90個体には分けつの生育に差異が認められなかった (分けつ数 4.2 ± 1.2 , 草丈 45.2 ± 5.3 cm)。そこで、生育盛期にあたる2008年7月31日に、前年の刈取高2cmの個体を地際の0cm, 前年の刈取高3cm, 4cm及び5cmの個体を地際から1cm, 2cm及び3cm

表-2 越冬芽出現期における刈取処理 3 ヶ月後の冠水深別の分けつ数

刈取高	冠水深別分けつ数 (本/個体)					
	0 cm	1 cm	2 cm	3 cm	4 cm	5 cm
0 cm	6.0 ±1.0	2.7 ±4.6	0.7 ±0.6	0.3 ±0.6	1.0 ±0.0	2.3 ±0.6
1 cm	4.0 ±1.0	5.7 ±3.2	5.0 ±1.7	4.3 ±1.5	6.0 ±2.0	3.3 ±1.2
2 cm	4.7 ±1.2	5.3 ±2.5	4.7 ±0.6	4.7 ±1.5	3.7 ±0.6	5.3 ±2.5
3 cm	5.7 ±1.2	4.3 ±1.5	5.0 ±1.0	4.7 ±2.1	6.0 ±1.0	4.3 ±0.6
4 cm	4.3 ±0.6	4.7 ±1.2	5.3 ±3.2	3.0 ±0.0	3.7 ±0.6	4.7 ±1.2
5 cm	4.7 ±0.6	4.3 ±1.2	3.7 ±0.6	4.3 ±2.5	4.0 ±1.7	4.0 ±1.0
無処理	4.0 ±1.0	3.7 ±0.6	3.7 ±0.6	3.7 ±0.6	3.7 ±0.6	4.3 ±0.6

注) 表中の数値は3反復の平均分蘗数±標準偏差を示す。

表-3 生育盛期における刈取処理 3 ヶ月後の冠水深別の分けつ数

刈取高	冠水深別分けつ数 (本/個体)					
	0 cm	1 cm	2 cm	3 cm	4 cm	5 cm
0 cm	3.7 ±3.5	2.0 ±1.0	2.3 ±2.5	1.0 ±1.0	0.0 ±0.0	0.0 ±0.0
1 cm	6.0 ±1.0	5.0 ±1.0	2.3 ±2.5	1.7 ±1.2	0.0 ±0.0	0.0 ±0.0
2 cm	6.3 ±3.1	4.7 ±1.2	3.7 ±0.6	1.3 ±1.5	0.7 ±0.6	0.3 ±0.6
3 cm	5.7 ±0.6	5.3 ±0.6	3.3 ±0.6	3.3 ±2.1	1.3 ±1.2	3.0 ±1.0
無処理	5.3 ±1.5	4.0 ±1.0	3.7 ±0.6	4.0 ±1.0	3.7 ±0.6	4.0 ±1.0

注) 表中の数値は3反復の平均分蘗数±標準偏差を示す。

で、各々 18 個体ずつ刈取処理を再度施し、無処理の 18 個体を加えた 5 処理 90 個体を設定した。刈取後は同日中に、前年と同様の 6 水準の冠水深として 3 個体ずつ冠水させ、計 30 処理 3 反復を設定した。その後、刈取処理から約 3 ヶ月後の 10 月 30 日に分けつ数を計測した。

表-2 に越冬芽出現期における刈取処理 3 ヶ月後の冠水深別の分けつ数を示した。越冬芽出現期には全処理で分けつの再生が認められた。刈取高が地際の 0cm の場合、1cm 以上の冠水深では、刈取高が 1cm 以上の刈取処理より、再生した分けつ数が少なかった。一方、越冬芽出現期の刈取処理前は供試した全 126 個体が 1 本ずつ花茎を有していた。しかし、刈取処理後の翌年は、無処理の全 18 個体が 1 本ずつ花茎を発生させたのに対し、刈取処理を施した 108 個体の内で花茎を発生させたのは、刈取高が 4cm 及び 5cm で、冠水深が 1cm 及び 2cm の 4 処理における各 1 個体の計 4 個体のみであった。

表-3 に生育盛期における刈取処理 3 ヶ月後の冠水深別の分けつ数を示した。生育盛期では、刈取高が低く、冠

水深が深いほど、分けつ数が減少する傾向にあった。特に、刈取高が地際の 0cm 及び 1cm の刈取処理では、4cm 及び 5cm の冠水深で分けつの再生が認められなかった。

ヒメガマを刈取りによって機械的に防除するには、生育盛期の複数回の刈取処理が必要とされる。米国では、生育盛期の夏季にシュートを地際の 0cm で 2 回刈取り、冠水深を 7.6cm 以上にすると、刈取後翌年の夏季には 100% の防除に成功した (Nelson 1966)。ヨシも水面下で複数回刈取れば再生が防げられる (桜井 1991)。そこで、キショウブの生育盛期に刈取高と冠水深を段階設定した結果、生育盛期に刈取高を 1cm 以下とし、冠水深を 4cm 以上に設定すれば、1 回の刈取処理で再生を防げることが明らかとなった。

ヒメガマのシュートの刈取後に枯死に至るメカニズムとして、シュートを水面下で刈取ると地下部への酸素供給が困難となり、地下茎の生長力が低下することが報告されている (Sale・Wetzel 1983; Sojda・Solberg 1993)。キショウブも刈取高より冠水深が深い場合、分けつの刈取面が冠水

し、酸素獲得が困難となって、再生が妨げられたと考えられる。

また、越冬芽出現期の刈取処理は、刈取高が 2cm 以上では翌年の分けつ数を減少させなかったが、花茎の発生については著しく抑制させることが明らかとなった。ゆえに、9 月上旬の越冬芽出現期における刈取処理は、キショウブが重点対策外来種として懸念されている近縁種との遺伝的攪乱や、種子散布による分布拡大を防ぐ意味で重要である。生育盛期及び越冬芽出現期の刈取処理と冠水条件を組み合わせ活用すれば、様々な状況に応じてキショウブ群落を適切かつ効率的に維持することが可能である。

4. まとめ

既に日本全土に分布が拡大している現在、根絶を望む考えは現実的ではない。キショウブ群落が他の生物に対して与える生態的影響については今後も検討する必要があるが、環境圧の高い場所において修景を目的とした緑化が期待される場合、キショウブは有用種である。ゆえに、今後の水辺の景観形成の場面では、本研究で明らかにした花芽を有する割合の高い分けつを活用して、春季に植栽後、開花による美観を速やかに創出することを推奨する。開花後は花茎を切除して種子散布を防ぐとともに、地上部を夏季から秋季に 1 回刈取って、翌年の稔実朔果数を 5 割～8 割まで減少させる。更なる生殖生長を抑制するためには、刈取り回

数を増加するなど検討して、群落の拡大を抑制し、その場で許容される群落を適切に維持することが望ましい。

引用文献

浅井俊光ら 2006. アヤメ科植物によるカドミウムの吸収除去に関する研究. ランドスケープ研究 69(5), 451-454.
 Caffrey, J. and C. Monahan 1997. Natural aquatic plant colonisation in a newly constructed Irish canal. *Hydrobiologia*, 382(4), 479-486.
 Cody, W. J. 1961. *Iris pseudacorus* L. escaped from cultivation in Canada. *Canadian Field Nat.* 75, 139-142.
 Jessen, K. 1955. Is *Iris pseudacorus* thalassochorous? *Acta societatis pro fauna et flora fennica*, 72, 1-7.
 角野康郎 1996. 「日本水草図鑑」, 文一総合出版, 61-63.

百瀬 浩ら 2001. ダム湖の水位変動域におけるビオトープ池 - 工法, 水生植物の生育と小動物の生息可能性の検討 -. *日本緑化工学会誌* 27(1), 136-141.
 Nelson *et al.* 1966. Cattail control methods in Utah. *Utah Dept. Fish and Game. Pub.* 66(2), 8-11.
 遠田和雄 1998. 第4章 水域における水質浄化対策の実践 第2節 キショウブによる水質浄化法. 「河川・湖沼の水質浄化技術の開発と汚染対策」. 工業技術会, 253-268.
 大滝末男・石戸 忠 1980. 「日本水生植物図鑑」, 北隆館, 110-111.
 Preece 1964. *Iris pseudacorus* in Montana. *Proc. Montana Acad. Sci.* 24, 1-4.
 Raven, P. H. and Thomas, J. H. 1970. *Iris pseudacorus* in western North America. *Madrono*, 20, 390-391.
 桜井善雄 1989. 11 沿岸帯水域の緑化. 亀山章他編 「最先端の緑化技術」, ソフトサイエンス社, 197-212.

桜井善雄 1991. 水辺の環境学. 新日本出版社, 122-125.
 Sale, P. J. M. and R. G. Wetzel, 1983. Growth and metabolism of *Typha* species in relation to cutting treatments. *Aquatic Botany*, 15, 321-334.
 Sojda, R. S. and K. L. Solberg 1993. Waterfowl management handbook. *Fish and Wildlife Leaflet*, 13.4.13, 1-8.
 Sutherland, W. J. 1990. Biological flora of the British Isles. *Iris pseudacorus* L. *Journal of Ecology* 78(3), 833-848.
 高橋理喜男・近藤哲也 2004. 第2部 事例研究 王立鳥類保護教会・英国河川公社・野生生物トラスト編 「野生生物のための河川環境管理 The New Rivers & Wildlife Handbook」, 環境コミュニケーションズ, 131-217.
 富野耕治 1994. 「NHK 趣味の園芸 作業 12 ヶ月 ハナショウブ」, NHK 出版, 16-131.

田畑の草種

野花菖蒲・菖蒲・文目・綾目・杜若・黄菖蒲 (アヤメ・カキツバタ・キショウブ)

いずれもアヤメ科アヤメ属の多年草。アヤメは山野の比較的に乾いたところに生えるが、カキツバタもキショウブも日当たりのいい湿地や草原で生育する。アヤメの小さいものは30cmくらいから、ノハナショウブやキショウブでは1mを超えるものも多い。花色は紅紫色から青紫色、紫、紋や覆輪の入ったものからまれに白色もある。詳しくは中嶋佳貴氏の論文を参照されたいが、黄色のショウブはキショウブである。

「菖蒲」も「杜若」も在来で、古人の目についていたはずであるが、「菖蒲」はサトイモ科の「菖蒲」として万葉の時代から歌に詠まれ、一方、紫色の花をつける「花菖蒲」や菖蒲花は、「杜若」として詠われてきた。「伊勢物語」の9段、在原業平の東下り。

唐衣着つつなれにしつましあれば

はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

の「かきつはた」を折り込んだ歌は高校の教科書にも取り上げられる。

(公財)日本植物調節剤研究協会
 兵庫試験地 須藤 健一

「花菖蒲」は、近世以降、品種改良が進み多様な花色の園芸品種が作出されてきたが、黄色系の花色はなく、黄色の花菖蒲は明治に海外から持ち込まれる「キショウブ」まで待たねばならなかった。

「花菖蒲」や「菖蒲」、「杜若」を詠み込んだ句や歌は多い。それらはみな仲夏の季語であり、多くの句がある。歌でも多くの歌人が詠っている。そんな中に俵万智の「チョコレート誤訳みだれ髪」という歌集がある。与謝野晶子の歌集「みだれ髪」を俵万智流に解した歌集だが、その中に「花あやめ」を詠った歌があった。そこに1首、黄色の駄作を加えてみた。

庭下駄に水をあやぶむ花あやめ

鉄にたらぬ力をわびぬ 晶子

庭下駄に鉄を持って近づけど

池に落ちそうあやめは切れず 万智

庭下駄に落ちそうなほど気になれど

池の黄菖蒲鉄とどかず 美代